
ささゆり物語

憂唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ささゆり物語

【著者名】

憂唯

N9819Z

【あらすじ】

片想いの男の子が、その思いを伝えるまでのお話

中学校のグラウンドを、教室の窓から見下ろしているおれは野村ミズキ。只今、担任のＳＴの長さにうんざりしているところだ。

今日は先生たちの学習会で午前終了だとついこの間・・・・早く帰つて飯食いたい。

ため息をついたそのとき、かすかにピアノの音色が聞こえ、おれは頭を上げた。

…アイネ・クライネ・ナハトムジーク。作者は確か、モーツアルトだったか。

ＳＴが終わり、おれは礼もそこそこにかばんを取る。「一緒に帰るか?」と声をかけられたが、「呼び出された!」と断る。

その言葉は本当だ。このタイミングでピアノを弾いてる奴は1人しか思いつかない。そして曲のセレクション。おれに来いと言つている以外に何があるなら教えて欲しい。

渡り廊下を通り、階段をのぼる。音楽室に着くころには曲は終わりを迎えていた。そつとドアを開けると同時に、最後の音が伸びされる。

おれは手を叩き、「流石だ」と一嘆。その言葉に「ありがとう」とにっこり返す彼女は花野さやり。おれの幼馴染だ。

「よかつた、来てくれた」

「ささゆり、今日音楽室入つて良かつたのか? 先生は?」「一人で掃除するつてことで入れてもらつた。ね、先生」

「さやゆりちゃんの頼みだからね」

と、中年の音楽の先生が準備室から顔を出す。さやゆりはピアノのいすからおり、先生から一本の箒を受けとった。

「二人なのに突っ込んでいいか?」

「ダメに決まってるでしょ」

諦めて箒を受け取る。昔からさわゆりはこんな感じだ。さわゆりとは、幼稚園からの付き合いだ。おれの母親のピアノ教室に来て、あまりに上手く弾くので反抗心を抱いて……ところのが始まりだった。

そういうえば、何で呼ばれたのか訊いてない。もし掃除だけとかだつたら……それでもいいか。

「さわゆり、用があるんじゃないか？」

「ああ、今日うちに来る？ つて訊こうかなって」

思わず絶句。いろんな意味で。

「でも、嫌だよね。彼女さんいるし」

おれはため息をついた。箒に体重をかけ、たるそりに声を出す。

「とつぐに別れてる」

「えっ？ そういうやなんか聞いたような。でも、もつ中学生なんだし、嫌じゃない？」

おれはもう一回ため息をついた。

おれはさわゆりが好きだ。幼馴染とか、友達とかじやなく、女の子として好きだ。いつからかは判らない。気づいたら好きだった。

でも、当然の如くさわゆりは気づかない。

友達だから、つてこともたくさんあるけど、いつまでも？ 幼馴染？ は正直つらいことがある。

おれは少し勇気を出してみることにした。

「別にいいだろ、？ 幼馴染？ だし？」

一番使いたくない、一番使い勝手がよく、そして正確な理由。そんな複雑なおれの感情は露知らず、さわゆりがにっこり笑う。

「そう？ よかつた。じゃ、さっさと掃除終わらせて帰らつ」

「おれはやうすに済んだはずなんだがなあ」

その嫌味は、しかしあさわゆりの耳に入ることはなかつた。

それから一時間と少しあと。おれはさわゆりの家の近くでうるうろしていた。少し早く来すぎたかな、と思つて、少し時間をつぶし

ているのだ。

小さい頃は近いこともあつてしまつちゅう遊びに行つたのだが、中学生になり、おれに彼女ができる、今回はかなり久しぶりだ。おまけに片思いの相手。ドキドキはなかなか止まらない。

昔はそんなことなかつたよな。母さんに渡されたお菓子持つて、今日は一人で何彈こうとか考えながら、この道を歩いてた。

・・・そうだ、お菓子持つて行こう。と、近くのコンビニに足を向ける。お菓子を持つていつたら、昔みたいに喜んでくれるだろう。だが、いざコンビニに行って悩んだ。ささゆりはどんなお菓子が好きだつただろうか、とお菓子コーナーをうろうろする。

確か、スナック系は好きじやなかつた気がする。手が汚れるから。ふと横を見ると、105円コーナーがあつた。よし、こじから選ぼう。

そして買つたのは、ポッキー。チョコとイチゴの二つ、210円や。ビニール袋を初めてのおつかいみたいに握り締めて、ささゆりの家に向かう。

そのままの勢いで、インターほんを押す。

ピンポン。ガチャ。

「お、ミズキ。遅かつたね」

ささゆりがにつこり顔を出した。家に招き入れられながら、ビニール袋を渡す。

「これ買つていたから。ハイ

「あ、ありがとう。後で食べよ

と、ささゆりは一階へ上がりつて行く。おれはそれについていく。久しぶりのささゆりの部屋は、おれの記憶と違つていた。シックな本棚。大人びたカーテン。きちんと整頓された机。唯一記憶と変わらぬのは、部屋の隅の、ささゆりのアップライトピアノだ。ささゆりは机にポツキーの入つたビニール袋を置くと、本棚の3段目を指でなぞつた。

「ミズキ、今日はなに弾きたい？」

「へ？ 弾く？」 感慨深くピアノを見ていたおれは、突然の問いを聞き返した。

「うん。 ミズキはなに弾きたい？」

「いや、おれは弾かないよ。 最近弾いてないし。 おれのダメな聴くよりわ、 わざゆり弾けよ」

「え～。 私、ミズキの聴きたかった。 一緒に弾きたかった」 そう言って口を尖らやすわやみに、「急にはムリだ」と囁いて諦めてもらひ。

「次は絶対だよ」 それにつりあえず頷いておく。

わざゆりはそれに納得したのか、ポツキーの袋を派手に開け、二・三本同時に口に入れた。 そして一本おれによじった。

「じゃあ、私何弾こうかな」

ぽき、といい音を立てつつ、わざゆりが思案する。 おれは「楽しい曲がいい」と、一応意見する。

「楽しい曲ねえ。 あ、これどう～？」

と、スコアを取り出し、ピアノを開けると、早速弾きだした。

弾む音がおれたちの周りの空気を踊りだす。 ジ・エンターテイナー。 いかにも楽しそうに弾く彼女におれも笑顔になる。 笑いながらもささゆりのきれいな両手は鍵盤をせわしく躍り続ける。 昔はスタッカートが付いているとリズムがとりにくいうとか言ってたけど、その辺も克服したみたいだ。 右手は小さく軽やかに舞い、左手は田の黒を駆け回り、曲をより盛り上げる。

チャン。 彼女のショーアゲ幕を閉じる。 おれは手をたたき、「上手くなっているんだな」と一言。

「くく、ありがとう。 ああ～、なんか緊張したつ」

そう言って右手でピアノをチャンチャカ力叩き鳴らやすわやみ。 照れ笑いはあのときのまま、変わらず可愛い。

「その曲どんな歌になるんだ？」

首を傾げながら、わざゆりは左手を鍵盤に乗せると、右手で作られていた音を曲へと変えていった。

「うーん。久しぶりに仲良しの友達に会えたけど、久しぶり過ぎて緊張してあまりお話できなかつた感じの歌かな。どうしたらいいかな？」

ピアノから両手を離すと、ささゆりは「ひらり」を再度見た。おれはポツキーをくわえ、少し考えてから答えた。

「残念だな。だけど、やっぱり久しぶりに会えて嬉しいんじゃないかな？」

そしてもう一本。やつぱ走薙つてうまいな。

ささゆりは「私も食べる」ヒ・ピアノのこすからおり、ポツキーと五線譜のノートをとつた。

それから、おれたちはポツキーを友に曲づくりを楽しんだ。おれは彼女の試し弾きに頷いたり、「こ」が足りないと言つていただけだが。それに丁寧に反応をかえすささゆりがまた可愛いのだ。ああ、幸せ。よく解らないがなんとなくありがとひつ。

しかし楽しいときは長く続かないものだ。

「あ、もうこんな時間！そろそろ親帰つてくるかな」
もうそんな時間かよ、と愕然とする。もつと一緒にいたいのに。。。
・だが、親が帰つてくる前に帰つたほうがいいだろう。

「じゃあおれ帰るわ

それをささゆりが「待つて」と止める。

・・・ハイ、心臓がバクテン中。

「今度一緒に弾くから、練習してきてよ。何がイイ？これは？」
あ、心臓こけた。

でも、一緒に弾こう=また来てね。だよな？期待していいよな？

「ラ・カンパネラ、連弾バージョン。私が編曲したんだよ~」

「・・・おれのよつなへたくそにそれ持つてくるって、嫌味ですか？ささゆりについて行けません」

「確かにそうだね」と笑つたささゆり。ささゆりはウソといつものを覚えたほうがいい。だが、そこが彼女のいいところだ。

「じゃ、これどう?」
「アーティシキー行進曲」
まあ、このくらいなら、多少心配が残るが。おれは楽譜を受け取つた。

「じゃあ、また明日ね」

玄関で手を振るささゆり。さよならに、何も進展しなかつた心惜しさは感じるが、また今度、連弾をするために一人であるだろ。おれはそれまで全力で練習しようと思つのであった。

明日学校終わったら家来てね

昨日届いたそのメール。その福音に朝からドキドキしていたおれの名はミズキ。只今、幼馴染ささゆりに絶賛片思い中の十五歳だ。そのささゆりからの誘いのメールである。恐らく前回やつたとい言つていた連弾をやろう、といふことだらう。

ウキウキしながら校門を出る。今日は職員会議で、部活はなし、騒がしい下校風景が広がっていた。早く帰ろうと、一人足早になつていたおれは突如声をかけられた。

「ミズキ。へへ、会えたね」

ささゆりである。半そでのセーラー服がまぶしい。

「このまま家に来てよ。帰つたほうがいいならいいけど」

「ああ、別に構わない。楽譜はあるよな?」

ささゆりが元気にななずく。まつたく、こいつはおれをどうにかしたのか。

そんなことを思いつつ、おれはささゆりと共に素敵な代わり映えのしない通学路を行くのであった。

次の日。おれは朝からずっと上機嫌だった。それも当然。短い間ではあるが、好きな女の子の家に行き、連弾までしたのだから。連弾の内容は、ささゆりについていくのが必死で、あまり覚えてない。いや、ささゆりはおれに合わせてくれていた。おれの記憶が少ないのは、隣にささゆりがいるという緊張のせいだらう。

「おいミズキ。次選択授業だぞ。いかねえのか?」

もうひとつ上の上機嫌の理由は、今日選択授業があるということだ。選択とは、文字どおり自分のやりたい科目を選んでやる授業である。おれは音楽選択で、ささゆりもそうである。ささゆりとは違うクラ

スだが、学年でやる選択では一緒に授業を受けられたのだ。

「あ、行くか」

音楽室まで行くと、「ミズキー」と高い声で呼ばれた。思わずため息をつきたくなるのを堪える。

「今日先生出張でいいから血頭だつてー！」

そう言いつつ近づいてくるのは、大田マリ。おれの元カノだ。

「マジか。ラッキー」

思わず冷たくなつてしまふのだが、しうがなことと思える。マリもそんなに気にしてないようだ。

「ミズキってピアノ弾けたよね？ 弹いてよ

「マリも弾けるだろ、マリ弾けよ

そう言いつつ、とつと教室を見、さそりを探す。さそりは窓際でぼんやり外を見ていた。らしくない。そばに行きたいが、やはり友達や元カノの前ではほかかられる。

「ねえねえ、ミズキ！」

マリに呼ばれ、おれは「なんだ？」とマリのほうを見る。マリはピアノのこすに座り、手招きしていた。

「何弾こうかな？ ねえ、ミズキは何がいい？

「何でもいいよ。マリの得意なのでいい」

「じょーかいっ

マリの右手が鍵盤を流れるように踊りだす。続いて左手がゆっくり入ってくる。子犬のワルツ。誰しもが一度は聞いたことがある曲だ。

周りの歓声を聞き、気分よく弾くマリ。自分流に早くしたり遅くしたりして、まさしく自分がだけの演奏をこなすマリで、流石だなど、素直な思いが湧き上がる。曲が終わり、「すごいねー」などの歓声を背負い、マリがおれに次なく積極的のマリが、次はミズキだと笑いかける。いつになく弾いてよ「とせがむ。しかし。

「それちゅうやんもピアノ弾けるんだよね？」 弹いて見せてよ

ひとりの子がそう言つてわざわざやりを呼ぶ。「え？」とわざわづは素つ頗狂な声を出しつつも、こちらに来てくれた。

「別にいいけど、マリちゃんみたいに上手じゃないよ」

マリが人形のように立ち上がり、いすを明け渡す。あまり快く思つてないのか、顔が少しこわばつている。なにかあったのか？その考えがまとまらないまま、ささゆりが弾き始めた。

・・・有名すぎるその調べ。Hリー・ゼのために。ベートーヴェンが、愛する女に捧げた曲。しかし、ささゆりが弾くと、こんなに変わるものか？

おれは鳥肌がたつた。女の憤り、やるせなさがそこにあった。他の人は気づいていないようだが、何回とこの曲を聴き、何回とささゆりの演奏を聴いてきたおれにはわかる。まるで、ささゆりが曲のイメージを喰つていいようだ。

それにしてもささゆりらしくない。曲を自分の感情に持つしていくことは珍しくないが、それは大抵楽しいほうに持つていかかる。先ほどからの行動から見ても、なにかあったと感じずにはいられない。また、マリの行動も気になるところがある。一人の変化が、なにかしら関係がある気がしてならない。

ささゆりが心配だ・・・。幼馴染としても、想い人としても。

学校から帰り、自宅でケイタイを開く。結局学校でささゆりと話す機会は得られなかつた。だからおれは、ささゆりに電話してみることにした。

しかし、いざ電話するとなる緊張してしまつ。迷惑じゃないかな。そつとして置きべきなのかな。そんな弱気を振り払い、おれはボタンを押した。

第9が流れ、じぱりくしてわざわづの声が曲をとめる。「もしもし、ミズキ？ どうしたの？」

電話の向こうの声に顔が赤くなる。見えてなくてよかつたと思つ。「ああ、今日暗かったなーって思つて。なんかあつた？」

「あ、いや。大した事じゃないんだけどね。ちょっと、変なことになっちゃって」

「どうしたんだ？」おれで良ければ、話聞くけど

ありがと、三ノ木も関係者だから言へよ。

おれが関係している？

集中した

「昨日、一緒に帰つたじゃん？ それ、見てた人がマリちゃんに教えたみたいで・・・。マリちゃんに、ミズキを取らないでよ、って言われちゃって。『ごめんね。もつと考えて行動しないといけないね』電話越しに、ささゆりが弱々しく笑つたようだつた。一方おれは軽く混乱していた。ささゆりと帰つたことが、こんなことになるなんて。マリがそんなこと言つなんて。・・・まだマリはおれを好きでいるのか？」

正直、おれはマリをそこまで好きではなかつた。あまりにしつこく言い寄つてくるので付き合つたに過ぎない。付き合つてからも、おれはそんなにマリを気にせず、デート等も全然行かなかつた。やがてマリもおれから離れていく、おれたちの仲は自然消滅したのだ。いまさらマリは何を言つているんだろう?男のおれにはよくわからぬ。

とりあえず、考えるのはいつでもいい。毎日いるやせぬりになにか言葉をかけないと。

「気に入らんよ。マリにはなんか言つておくからさ。元氣出せ」

ね。私たち

その言葉に少し傷つく。間違つたことは言つてないんだけどなー。

心が寂しい。だが、残念なことに自分はそういうことに慣れている。
おれは言葉を読むた。

うん、ありがとう。いいよ、じゃあまた。ばよーばよー。

自分で認めるとはつらっこいとなのだな・・・。電話を切りつつ、

ため息をつく。進展のない、この関係。打ち破るには、行動しかないとわかっているのに。

「のままでもいいと思つ自分がいるのは氣づいてい。ずっとそばにいた。見守つていける。それもありなのかもしれない。だが、ささゆりが誰かとどこに行つてしまつのが、果たしておれに耐えられるのか……？」

次の日、下校時刻。階段下で、おれはマリと対峙していた。別に、教室でも良かったのだが、これ以上のうわさは立てたくないかった。

「マリ、もう付き合つてないんだから、おれのことでなんか言うのやめろよ。その、おれも悪かつたとは思うけど、ささゆりは？ 幼馴染？ なんだから……」

マリがむつと頬を膨らます。

「幼馴染って、ほんとに思つてるの？ あの子は？」

お、思つてなかつたら嬉しい、なんて言つている場合ではない。

「そうに決まつてゐだろ？ 小さい頃からずつと腐れ縁だったんだから」

「何よ。あたしの知らないミズキをあの子は知つてゐて言いたいの。確かにそうかもしないけど、それでも、あたしはミズキの……」

「元カノ。だる」

マリが黙る。だが、マリが言おうとしたことはもうウソになつてしまつだらう。おれはマリから目を逸らさなかつた。マリは俯いた。悪い気はするが、それでもいつかはけりをつけなければならぬのだ。

おれのためにも。もちろんマリのためにだ。

「「めん。そうだよね。もう、あたしはミズキの彼女じゃないもんね。うん……」

マリはおれから踵を返し、そのまま立ち去つた。おれも部活に行こうと、廊下に出たところでばつたつさをゆつと会つた。

「あ、やせゅう。言ひておいたから、マリ」「

「うん。せっぱりマリちゃんに悪いことしたかな」

「しょうがなよ。おれがマリのこと好きになれないんだから」

十五歳で恋について語るとか思わないが、せっぱりお互いに好きになれば、それは無理だと俺は思うのだ。

「なにいつてんの、ミズキ。ミズキって氣障だよねえ」

せわゆりに笑われ、おれは頬が熱くなるのを感じた。恥ずかしい。「別にいいだろ。氣障でも」

「そうだね。それがミズキなんだし、私は氣障でも構わないよ」
せつきの言葉より恥ずかしい。心臓が高鳴る。友達として言ってるのはわかってるのだけど、それでもちよつと期待したくなるじゃないか！

「おれ、部活行かなきゃー……じゃ

「う、うん！ がんばってね」

おう、と手を挙げて答える。あんな風にがんばってと言われたら、頑張るしかないじゃないじゃないか。

そんなことを想いながら、少し成長した気がするおれは廊下を走るのでだった。

「ミズキ！ ほら、早く！ サッカー部で写真撮りうぜー！」
そう言つて腕をつかまれ、拉致られるおれは野村ミズキ。今は卒業式の後、みんな思い出作りにと、お互に写真を撮りあつてゐるところだ。

「ほら、部長なんだから真ん中行けよ」

「真ん中行くのはいいけど、オイ、体重かけんなって！」

パシヤ。西中サッカー部最後の思い出は、メンバーの半分がつぶれた写真となつた。

サッカー部のメンバーで撮つた後、おれはあたりをぐるりと見渡した。だいだい仲良かつた奴とは撮り終わつてゐるが、一番撮りたいといつても過言でないあいつと、まだ撮れていなかつた。向こうで忙しいのだろう。あいつは意外と人気者だから。

卒業式といつたら、告白とか考える人もいるのだろうが、おれは全く考えていなかつた。入試はまだだし、なにより志望校が一緒にだから。まだ、幼馴染のままでいい気がする。

「ミズキ！ 一緒に写真とろうよ！」

突如おれの名前を呼んだのはマリだった。ため息を押し殺して振り向く。するとなぜか後ろにはささゆりが付いてきていた。

「一緒つて、三人か？」

「そうだよ！ ね、セーチャン」

セーチャンつて、いつの間に一人はこんなに仲良くなつたのだろうか。女子というのは本当にわからない。

「私は別にいいのに」

「いいじゃん。中学時代の思い出にさ。ね」

セセユリは別におれと撮らなくともいいのか・・・。少し悲しいな。

そんなことを考えている間に、マリはたまたま近くにいた人を捕

まえて撮つてくれと頼んでいた。いつもことは行動が早いんだな。

「撮るよー。はい、チーズ」

パシヤ。

「ありがとね。やつた、スリーショット！　一人もありがとう。また写真あげるね」

そう言つと、マリはすぐにどこかに行つてしまつた。まだ撮り足りないのだろう。残されたセセリとおれは、顔を見合つて、お互に苦笑した。

「マリちゃんつて、元気な子だよね」

「そうだな。ま、いいんじゃね」

おれとセセリの間に風が吹き、セセリは髪を押さえ、そのまま耳にかけた。その仕草がかわいくて、思わず見とれる。どこまでおれを惚れさせれば気がすむんだ。

「そういえば、久しぶりじゃない？　こうして一人で話すの」

「そうか？　まあ、受験で忙しかつたもんな」

見とれていたことに気づかれないように、おれはそっぽを向いて頬をかいた。するとセセリは回り込んで、おれの目を見てきた。

「まだ過去形じゃないでしょ。ま、ミズキからしたら楽勝なんだろうけど」

大きな目をすつと細め、大人な女性的にふつと笑う。いつもなら「ガキのくせに」とか言えるのに、今日はけつこう様になつていて変にどきどきする。

「そ、そんなことないよ。おれだって勉強してるよ」

「勉強しなくてたつてミズキ受かるじゃん。いいよね、勉強できる人つて」

「そんなことないって！」

「ふ〜ん。どうだか」

そう言つてセセリは踵を返しかけた。もつ行つてしまつのかよ。おれは慌てて勇気をかき集めた。

「おい、セセリ。写真撮らね？」

「え？ さつき撮つたじゃん。まだ撮るの？」

まあ、当然の反応だよな。それでも、おれは引き下がらなかつた。そんなことに必死にならなくてモト、思わない」ことはないが、それでも好きな子とのツーショットは魅力的だと思つ。

「一人では撮つてないだろ」

「一人でつて。恋人同士みたいじゃん。嫌じやないの？」
「いいね、恋人同士。全然嫌じやないけど？」でも、嫌じやないのと聞かれた時点で、それはないんだよな・・・。

「嫌じやないよ。だつて？ 幼馴染？ だろ？」撮つておこいつぜ」

事実、幼稚園のときも、小学校のときも、一人で写真は撮つてきているのだ。表面上不自然なことはない。表面上は。

「写真あんまり好きじやないんだけどなあ・・・。いいよ」

よし。喜びたいのを押さえ、おれはカメラを取り出した。そこで、ふと悩む。誰に撮つてもらおうか。

男子に頼んだからかわれるのは間違いないし、かといつて女子に頼むのも気が引ける。しょうがない、おれはカメラのレンズを自分の方に向けた。

「自分で撮るの？」

「いけないか？ ほら、寄つて」

寄つてと言つておきながら、おれは出来るだけささゆりから離れていた。風がふき、ささゆりの髪がふわりとおれの首を掠めていく。汗がひどい手からカメラを落とさないよう気に気を付けながら、おれはシャッターを押した。

ぱしゃり。

「よし」カメラを裏返し、画面を一人で覗く。そこにはなんだかんだ満面の笑みのささゆりと、カメラを持つているからか、弱冠不自然なおれの顔があつた。

それを見てささゆりがくすりと笑う。

「ミズキ変な顔。またちょうどいね。私そろそろ帰るから」

それだけ言つて、ささゆりは友達のところに行つてしまつた。ち

いさくため息をついた後、おれはもう一回画面を見た。よく見るとおれの顔は少し赤くなっている。なぜかに気づかれなかっただろうか？

・・・気づいてくれたほうが、いいのかも知れない。いや、やつぱ自分で言つたほうがいいに決まつている。おれはカメラをしまつた。

「ミズキ！ 今度は先生入れて撮るうぜ！」

「ああ、わかった。今度は潰すなよ」

一応そう言つて、おれはサッカー部員の元へ歩いていった。ちうつとわわゆつが友達と喋つているのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9819z/>

ささゆり物語

2012年1月14日16時59分発行